

論説

齋藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書（2020年9月）に
おけるマルクス利用・援用の問題性
——「脱成長 Kommunismus」主張のための我田引水解釈・捏造・虚言・妄言について——

西 野 勉

〔序〕今日の気候変動の原因・対策についての齋藤の解釈・主張の整理

（1）気候変動の原因に関する齋藤の解釈

現代先進国の「帝国的生活様式」（資本主義）が気候変動をもたらした構造的な原因である。「帝国的生活様式」とは、グローバルサウスからの富の取奪とそこへの環境負荷の転嫁（「外部化」）によって成り立っており、それが「犠牲の不可視化」によって進行し、「その外部を使い尽くした」結果、「地球の生態学的限界」という危機として可視化したのが今日の気候変動なのである。これが齋藤の解釈である。

（2）これへの対策諸論に対する齋藤によるその限界指摘

1) この気候変動の危機に対する対策として種々の戦略が提唱されているが、基本的なもののひとつが「気候ケインズ主義」「グリーンニューディール」である。

しかし、「グリーン革命」と呼ばれるクリーンエネルギー技術の発展、そこから発生する多種のビジネスチャンス、それを誘導し、支える財政・公共投資を想定したこの戦略は、「経済成長の罫」にはまった（成長志向から脱却しない）代物であって、「経済成長」と「環境負荷」とのデカップリングは不可能であ

ることを理解していない。

先進国の経済成長そのものを止めなければ環境負荷は増大し続ける。「結局、緑の経済成長を目指す先進国の取り組みは、社会的・自然的費用を周辺部へと転嫁しているにすぎない。」p.86。

2) もう一つの基本的な戦略提唱は、現状を「地球の生態学的限界」「環境的な上限」「プラネタリー・バウンダリー」を超えた段階に達した状態ととらえ、地球全体の人間の生活活動・経済活動をこの「限界」「バウンダリー」の範囲内に納めようというものであるが、この戦略実現には「帝國的な生活」に浸りきった先進国から、その「外部」の諸国への資源の国際的再分配が必要となってくる。しかし、資本主義のもとではそれは不可能だ。

以上が今日の気候変動の原因と提唱されている戦略・対策についての斎藤の問題整理であるが、私は気候変動問題について科学的な研究を行なっているものではないのでこれ自体に対しては一応頷いておくだけである。

本題はここからである。

以上のような問題整理から斎藤は、〈今日の気候変動＝「地球の生態学的限界」を克服するには「脱成長」しかない、しかしながら、資本主義の下では「脱成長」は実現不可能であって「コミュニズム」に移行する以外にない。ただし、実現すべき「コミュニズム」は「脱成長」を実現するためにこそ必要なことなのだから「脱成長コミュニズム」でなければならない。〉という主張を展開する。そして、この主張の理論的支えとしてマルクスを持ってくる。つまり、マルクスが晩年到達した「コミュニズム」展望は、「経済成長をしない循環型の定常型経済」＝「脱成長コミュニズム」だったのだと。

しかし、「コミュニズム」に解決を求めること自体は正当としても、斎藤が「脱成長コミュニズム」論を主張するためにマルクスを利用・援用するそのマルクス理解は、以下詳説して行くように、自己の主張に合わせるためのベテンに満ちた強引な我田引水のひどいものであり、そこから導く主張は虚言・妄言というべきものである。そのことを明らかにするのが本稿の課題である。

〔本題〕 斎藤が「脱成長コミュニズム」主張のために利用・援用する際のマルクス解釈は、自分の主張に合わせるためのペテンに満ちた強引な我田引水にもとづくもので、そこから引き出す主張は虚言・妄言の類いである。

〔I〕『資本論』解釈におけるペテン…自己の主張に利用するための強引な我田引水の極み

斎藤のマルクス援用の強引な我田引水によるペテンは多面に渉るが、まず始めに順序として『資本論』の援用に見られる次の二つの例を指摘しておかなければならない。

(A) 本源的蓄積論解釈におけるペテン

「困い込みの過程を『潤沢さ』と『希少性』という視点からとらえ返したのがマルクスの『本源的蓄積』論なのである。」p.237という解釈の我田引水・ペテン

マルクスの「本源的蓄積論」の主題は、西ヨーロッパにおける「資本主義的生産の創生分析」であって、その意義は「創生分析」のなかで最も根幹をなしている封建的諸制度のもとで農民(労働者)がそれによって生存を保証されていた大地との〈自然的結合・強制的緊縛〉の解体の解明、つまり「労働者と労働実現条件(の所有)との分離」「生産者と生産手段の根底的分離」つまり「自己労働にもとづく私的所有の解体」過程の解明であること、その過程が血塗られた過程であったことの解明にあること、このことはマルクス自身が当の『資本論』その他で述べていることであって、従来の「本源的蓄積論」の主題・意義の理解は、当然のこととしてこれをその通り受け止めてきた。

ところが、斎藤はこの従来の「本源的蓄積論」理解では、「マルクスの資本主義批判としての『本源的蓄積』論の意義をつかむことは到底できない。」(p.237)などと宣い、「本当は、この困い込みの過程を『潤沢さ』と『希少性』という視点からとらえ返したのが、マルクスの『本源的蓄積』論なのである。」(「困い込みの過程」とは、農民からの土地奪取過程の主要形態のこと―筆者)「マルクスによれば『本源的蓄積』とは資本が〈コモン〉の潤沢さを解体

し、人工的希少性を増大させていく過程のことを指す」(同上)などと言い放つのである。このとんでもない解釈・主張はどこから来ているのか?それは自分の「脱成長 Kommunismus」論主張に強引に引きつけた我田引水のマルクスの「本源的蓄積論」解釈・利用から来ている以外の何物でもないのである。

斎藤は「資本主義は絶えず欠乏を生み出すシステム」なのに対して「 Kommunismusはある種の潤沢さを整えて行く」システムなのだ (p.234-5) という主張を行い、前資本主義段階において地域社会に根強く存続していた〈伝統に重きをおいて営まれる生産・生活共同体(の在り方) —これを「コモン」あるいはイギリスで入会地名として残る「コモンズ」として重視するのだが—に存在した「潤沢」を資本主義は破壊し、「 Kommunismus」はこれを再建するのだと主張する。そして「潤沢」を再建する「 Kommunismus」は、「コモン」の経済の在り方である「経済成長をしない循環型の定常型経済」「脱成長 Kommunismus」だというのである。この主張についてのマルクス利用の問題点は、この後に続く (B) および [II] の (B) で明らかにしているのでそれを参照されたい。こうした理屈に強引に引きつけて発出されているのが、「囲い込みの過程を『潤沢さ』と『希少性』という視点からとらえ返したのが、マルクスの『本源的蓄積論』」なのだとか「『本源的蓄積』とは「〈コモン〉の潤沢さの解体」のことなのだといった主張なのである。

資本主義が一部に「潤沢」を他方に「欠乏」を生むということ自体は誰も否定しない。また、「本源的蓄積」過程で遂行される農村民の大地との〈自然的結合・強制的緊縛〉の解体、それによる農村民の「生産手段からの自由」「人格的自由」いわゆる「二重の意味での自由」な労働者への転化は、労働・生産主体が「人格的自由」を手に入れた代わりに「生産手段との結合・緊縛」という生存保証を失ったという意味で「潤沢」を失ったと言ってもよい。しかし、〈潤沢さの解体〉では、マルクスが析出してみせた「労働者と労働実現条件(の所有)との分離」「生産者と生産手段の根底的分離」という歴史的事態の本質がぼやけ、拡散してしまうだけである。

マルクスの「本源的蓄積論」の主題・意義は、上記したように「労働者と労働実現条件(の所有)との分離」「生産者と生産手段の根底的分離」つまりと

ころ「自己労働にもとづく私的所有の解体」という「資本主義的生産の創生」における歴史的に重要な本質的事態の分析・解明にあるのであって、その過程が前資本主義的「潤沢さ」の解体を含むとしても、その「潤沢さ」の解体を主題・意義としているのではない。そんなことは「脱成長コミュニズム」論主張のために、前資本主義的な〈伝統に重きをおいて営まれる生産・生活共同体〉＝〈コモン〉における〈潤沢〉、その資本主義による解体、〈脱成長コミュニズム〉でのその再建〉を唱える一環としてマルクスの「本源的蓄積論」を利用するための我田引水の勝手な解釈・主張以外の何ものでもないのである。

斎藤本人がマルクスの「本源的蓄積論」をそのようものとして「とらえ返し」たいというのならそれは勝手であるが、自分の「とらえ返し」ををもってマルクスの「本源的蓄積論」がそうなのだと主張することになるとそれは全くの暴論・ペテンの類いである。

(B)「資本主義的蓄積の歴史的傾向」節結語の我田引水偽訳とその解釈のペテン
あまりに有名な箇所だが念ため前後を含めて示す。

「資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果—すなわち、協業と、土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有—を基礎とする個人的所有を再建する。」(社会科学研究所監修・資本論翻訳委員会訳『資本論』新日本出版社・第1巻b, 1301ページ。なお、私が読み込んだ長谷部文雄訳青木書店版もマルエン全集②3bも「共同占有」を「共有」としているだけで基本的に変わらない。)

下線部分のドイツ語原文は次の通り。

Diese stellt nicht das Privateigentum wieder her, wohl aber das individuelle Eigentum auf Grundlage der Errungenschaft der Kapitalistischen Aera: der Kooperation und des Gemeinbesitzes der Erde und der durch die Arbeit selbst produzierten Produktionsmittel. (Diets Verlag, Das Kapital p.791)

上掲の訳は、とくに下線部分はその解釈をめぐって論争が展開された歴史的

経緯を踏まえた上で、誤解の生じないよう極めて正確な訳になっている。

(1) ところが、斎藤は、その著書143ページにおいて、この下線部分を「協業と、地球と労働によって生産された生産手段をコモンとして占有することを基礎とする個人的所有をつくりだすのである。」などととんでもない偽訳を読者の前にして見せるのである。

「土地 (der Erde) の共同占有 (des Gemeinbesitzes) ならびに・・生産手段の共同占有」の部分で「地球と・・生産手段をコモンとして占有すること」などというとんでもない偽訳をして見せるとはマルクスも目を丸くするだろう。こんなことを公然として恥じない非学問性は上記の本源的蓄積論解釈の例と同じである。

“Erde”は辞書上からは「地球」でも許されるが、ここでマルクスが述べていることは、労働・生産主体による2種類の生産手段の「共同占有」つまり〈人間の関与(労働)を経ないで天然に存在する生産手段としての土地〉と〈労働そのものによって生産された生産手段〉の2種類の生産手段の「共同占有」のことなのであって、生産手段としての「土地」と訳さなくてはならない。労働主体による生産・取得活動においてその生産手段となる土地は、地球上の大地のごく限られた一部だから「土地」なのである。「地球」などと訳せば、文字通り全人類あるいは全生物の生息基盤である北極・南極、5大陸、7つの海を有する一つの惑星としての茫漠とした広大な「地球」を意味する以外になく、ここに当てはめるなど論外のことである。

何のためにこんなことをするのか？それは以下で明らかにするように、自己の「脱成長コミュニズム」主張をマルクスの利用・援用によって支えようとする「ためにする」あざとい所業以外の何物でもないのである。斎藤が主張する「脱成長コミュニズム」は、いわば気候変動克服のため必要な全人類あるいは全生物の生息基盤である地球の生態学的管理の体制であって、それを斎藤は「地球をコモンとして管理する」体制 (p.142) と名付ける。そして、この自分の主張を強引にマルクスの利用・援用によって支えようとして、この箇所を目を付けて、このような「地球と・・生産手段をコモンとして占有する」など

という偽訳まで平気でしてみせるのである。斎藤がここでいう「コモンとして管理する」と言う意味は「社会的公共財の民主主義的管理の在り方」(pp.141-2)のことだというのが、「地球」を民主主義的に管理するというのは、それはそれで現代的課題として積極的な提言ではあるが、マルクスの偽訳によって、ここでそれをマルクスが述べていることだと主張するなどにはためにする度の過ぎた我田引水のあざとい所業以外の何物でもない。

(2) その度の過ぎた我田引水のあざとい所業の偽訳・解釈と一体化したものとして、『資本論』上掲引用文の「資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。」の解釈においても同じ我田引水の強引なベテン解釈を行なう。

マルクスはこの「否定の否定」の内実について、それは「個人的所有」の「再建」だという総括を行なったのであるが、斎藤はこれについて次のように言う。マルクスの言う「一度目の否定は、資本によるコモنزの解体」であり、その「否定」は「コモنزの再建」のことなのだ(p.258)と。ここにいう「コモنز」なるものは、先に触れたが前資本主義段階において地域社会に根強く存続していた〈伝統に重きを置いて営まれる生産・生活共同体(の在り方)〉のことなのであって(pp.180-4, pp.191-5, p.237-8), 斎藤はその在り方に「脱成長 Kommunismus」の在り方を求めているのだが、その「再建」をマルクスがここで展望したのだと言うのである。

この箇所は、〈資本主義生産・取得様式は独立生産者の私的生産・取得様式の「否定」であり、そしてその資本主義生産・取得様式の「否定」は「資本主義時代の成果—すなわち、協業と、土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有—を基礎とする個人的所有を再建する。〉としている箇所なのであって、主題は「生産・取得様式」の転変なのである。斎藤が「脱成長 Kommunismus」のモデルとする「コモنز」なるものの転変を主題として論じているようなものでは断じてないのである。『資本論』をまともに学習すればわかることである。

この「個人的所有」「再建」の意味については、資本主義の下で独立生産者から資本の手に奪われていた労働・生産主体の(a)生産手段への結合 b)生

産過程の指揮管理 c) 生産物の取得〉のトータルな機能を労働・生産主体が自らの下に取り戻す＝「再建」することにはかならないというのが私の解釈であり（『経済』1997年10月号に要約を掲載）、また、その解釈をめぐる論争については『資本論体系・第3巻』（有斐閣、1985年）の〈第Ⅱ部C〉で私の整理を提示してある。論争参加者は多数に上ったが、自己の主張に合わせるために、このようなマルクスの主題から全く逸脱した「コモンズの再建」なるなんとも我田引水の強引なベテン解釈をするような人は皆無であった。

上の本源的蓄積論解釈問題でも同じことを述べたが、本人が個人的にそう解釈したいというならそうするのは勝手だが、多くの人に読んでもらおうとする著作でマルクスのこうした公然とした偽訳・強引なベテン解釈にまでおよぶとなれば噴飯物だけでは済まない学問的犯罪であろう。

(3) さて、私は以上で、斎藤がその著143ページで掲げている『資本論』第1部「資本主義的蓄積の歴史的傾向」節結語重要部分の斎藤訳文「協業と、地球と労働によって生産された生産手段をコモンとして占有することを基礎とする個人的所有をつくり出すのである。」について、それが斎藤本人が行なっているとんでもない偽訳であること、その解釈がとんでもない我田引水のベテンであることを『資本論』当該箇所でのマルクスの叙述の正確な理解を対置して明らかにした。

しかし、斎藤の訳文がとんでもない偽訳であり、解釈が我田引水のベテンだと言うことを即座に判断出来、批判が出来るのは、私がマルクスを深く研究し、当該箇所をめぐる「個人的所有再建」論争に深く関わってきた研究者であるからであって、普通の人はそうはいかない。

実のところ、斎藤はその偽訳文を掲げるページ冒頭で、「『資本論』第1巻の末尾の有名な1節でマルクスは次のように述べている。」（同上143ページと）いう記述をしたその直後に、正しい訳文との対比もなく（それを掲げることもなく）、しかもこれが自分独自の訳だという断りもなしに、この偽訳文をかかげるのである。そうすると、普通の人は何の疑いもなくそれが正しい訳なのだ、マルクスはそう言っているのだと受け取ってしまうことになる。この本の読者の多くがそうなったであろうし、なるであろう。そういう仕掛け・仕組みに

なっているのである。これは偽物を本物として売りつける仕掛け・仕組み、つまり詐欺・ペテン以外の何物でもない。

さらに、この大ペテンの裏側を追求するために、この偽訳に付けられている³という出所を示す註をたどって著作370ページ〈第4章の註の3〉を見ると、出所が〈Karl Marx, Das Kapital Band I ,in Marx-Engels-Werke Band 23(Berlin Dietz Verlag 1972), 791.〉となっている（これは私が上掲したドイツ語原文ページと同じである）。しかし、原文ページだけではこの訳文が本人独自の訳なのかどうか分るわけがない。そこでさらに進んで、この著全体の註に関する凡例（366ページに記されている）にたどりつくと、そこには「マルクスからの翻訳は、次のような略称を用いて、巻数と頁数を記載した。」として、〈『資本論』—資本論翻訳委員会訳『資本論』（新日本出版社）〉とされている。何とやることであるか！この凡例に従うならば、マルクスの『資本論』の翻訳に関しては〈資本論翻訳委員会訳『資本論』（新日本出版社）〉に依ることになっている。つまり、この斎藤偽訳の元を追求して行くと、それは〈資本論翻訳委員会訳『資本論』（新日本出版社）〉のものということになってしまうのである。こんなことを信じたらとんでもないことである。手の込んだ大ウソ・ペテンである。こんなペテンも見破っておかなければならない。

以下でも次々と明らかにして行くと、ペテンの塗り重ね、これがこの著における我田引水的マルクス利用・援用の特筆すべき特徴である。ここにその凝縮的姿を見ることが出来る。

〔Ⅱ〕マルクスの「最晩年の真の理論的な大転換」論(p192, p 203)を

捏造する手法とそのペテンに満ちた我田引水による虚言・妄言

斎藤は、晩年のマルクスが「資本論」までの「生産力至上主義・進歩史観・ヨーロッパ中心主義」から「完全な決別」をし（p.149-178）、「西欧資本主義が目指すべきコミュニズムの構想そのものの大きな変容」（p.192）に至った。要するに「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」を「評価」（p.193,p226など）し、その「高次のレベルでの復興」を唱えたのだ。つまり「脱成長コミュニズム」を展望するに至っ

た (p.199)。こう主張するが、これは全くの捏造、ペテンに満ちた我田引水の虚言・妄言である。

(A) まず、晩年のマルクスが『資本論』までの「生産力至上主義・進歩史観・ヨーロッパ中心主義」から「完全な決別」をした、という主張のウソ・妄言性について

ここではこの三位一体で語られる「決別」なるものの「生産力至上主義・進歩史観」からの「決別」のウソ・妄言性を明らかにする。「ヨーロッパ中心主義」からの「決別」なるものの妄言性についてはその都度触れる。

(1) 斎藤は、マルクスについて「共産党宣言」を取り上げ、「資本主義の発展は生産力の上昇と過剰生産恐慌によって革命を準備してくれる。だから社会主義を打ちてるためには、資本主義の下で生産力をどんどん発展させる必要があると考えていた節がある。いわゆる『生産力至上主義』である。」(同書 p.150)という。これは真っ赤なウソである。

マルクスは生産力の発展を歴史の根本的推進力として把握した。しかし、それは斎藤がいうような「生産力至上主義」などというものでは全くなかった。だから、そこからの「決別」などというのも虚言・妄言である。

① マルクスが言う生産力というのは人間の生命活動の根源である自然との意識的な物質代謝活動の力のこと（「気候変動」で提起されている自然の意識的管理という力をも含みうる広い射程もったもの）であって、その発展こそ人間の発展の指標であり、歴史を前に進める根源的な力であるというのであった。この認識は、次の(2)で見ると「ドイツイデオロギー」段階に確立され、『資本論』を通じて生涯何の揺らぎもない根源的立場・認識であった。この認識は斎藤の言うような「生産力至上主義」などというものとは似ても似つかぬものであって、マルクスを真剣に学んだ者なら周知の通り、機械制大工業まで発展した生産力が資本の力となって労働を支配している事態に矛盾を見だし、その矛盾の克服の必然が次の社会を生み出す現実の力だとする認識なのである。斎藤が言うような、生産力が発展すれば自ずと次の社会に移行するから「社会主義を打ちてるためには、資本主義の下で生産力をどんどん発展させる必要がある

あると考えていた節が」あったなどというようなことは全くない。まともにマルクスを理解することをしないで発する浅知恵によるベテン・妄言である。

② 晩年になってもそこからの「決別」など全くないことを確認しておこう。

例えば、死の3年前のマルクスによる1880年6月30日付けの「フランス労働党の綱領前文」(ME全集19巻p.234)を見よ。そこでは、「生産者の解放は…すべての人間の解放であること」、「生産者は生産手段を所有する場合にはじめて自由でありうること」「生産手段が生産者に所属することのできる形態」は「1.個人的形態」と「2.集团的形態」の二つしかないこと、その「2.集团的形態」について「この形態の物質的および知的な諸要素は、資本主義社会そのものの発展によって作りだされてゆく」ものであること、を述べている。

ここでマルクスは、「すべての人間の解放」=共産主義における「生産手段の集团的所有形態」実現のための「物質的および知的な諸要素」は「資本主義社会の発展」がつくりだすことを凝縮的にのべているが、ここに言う「物質的諸要素」とは、先に掲げた『資本論』第1部で展望された将来社会の基礎となる「資本主義時代の成果一すなわち、協業と、土地の共同占有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共同占有」のことであり、「知的諸要素」とはそれを担う発達した人間のことである。これはマルクスをまじめに研究した者にはただちに理解できることであろう。つまり、資本主義段階における生産力と人間の発展・発達、それこそが(フランス)共産主義の前提だと言っているのである。「ドイツイデオロギー」段階に確立された生産力の発展(=人間の発展)を歴史の根本的推進力として認識する史観にいささかの揺るぎもないことを示している。

晩年のマルクスが「資本論」までの「生産力至上主義」から「完全な決別」をし、「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」に至ったなどという斎藤の主張が、如何に虚言・妄言であるかを証明している。

(2) 斎藤は、マルクスの「進歩史観」について〈「資本主義がもたらす近代化が、最終的には人類の解放をもたらす」とマルクスが楽観的に考えていた、というもの〉だと解説し(p.152)、晩年そこから「完全に決別」したのだという。

このウソを明らかにしておこう。

私は、学位論文『経済学と所有—「経哲草稿」から「資本論」—』（世界書院,1989年）において、「経哲草稿」から『資本論』に到るマルクスの歴史理論・経済理論形成についての研究成果を整理しているが、その第1章で次のことを明らかにした。

「経哲草稿」段階においてマルクスは「人間的（の）本質」の発展を基軸に据えて歴史をとらえる視座を打ち出したのであるが、しかし、資本主義のもとでは人間の本質的活動である労働が疎外された状態にある。この疎外は何によって形成され、どうすればそれを打破できるか、こう問題を立てた。これがマルクスの史観および経済理論形成の出発点であった。「ドイツイデオロギー」段階ではそれを発展させて〈生産力の普遍的発展〉→〈人間の普遍的関連〉→〈諸個人の普遍的発展〉という視座に結晶させるのであるが、それは、「自然に対する人間の局限された関わり合いが人間相互間の局限された関わり合いを制約し、そして人間相互間の局限された関わり合いが自然に対する人間の局限された関係を制約する」という深い認識にもとづくものであった。「自然に対する人間の関わり合い」の度合いが「生産力」、「人間相互間の関わり合い」が「交通形態」「市民社会」であるにとらえ返され、そこから「私的所有（資本主義のこと・私）は、生産力の一定の発展段階にとつての必然的な交通形態」であるととらえる視座が導かれる。そして、私的所有止揚（疎外止揚）の必然性を大工業という生産力と私的所有という交通形態との矛盾（生産力と生産関係との矛盾）においてとらえる視座にまとめ上げて行くのである。その矛盾の現れが〈生産力の「破壊力」化〉と〈「階級対立」の激化〉としてとらえられる。マルクスの史観と資本主義認識の定礎であった。

その後この史観・認識のもとに超人的な努力で資本主義段階の社会の解剖に邁進し、資本主義生産様式の経済理論的解明と歴史理論的解明を果たすのであるが（同上『経済学と所有』第2章から第5章参照のこと）、その史観・認識はその解剖の根底を支え貫き、あの〈資本主義的蓄積の歴史的傾向〉節末尾の将来社会展望を導くのである。そして、それは上述したように、死の3年前1880年の「フランス労働党綱領の前文」における、〈資本主義段階における生

産力と人間の発展・発達、それこそが(フランス)共産主義の前提だ」という明言に貫徹して行っているのである。また、それは次に明らかにするように、1881年ザスーリチ宛の手紙において、資本主義が集团的生産様式という生産力発展の成果を達成しているからこそロシアの「農耕共同体」が「ロシア社会再生の拠点」になりうるのだという認識に貫徹して行っているのである。

生産力の発展とそれに相即する人間の発展・発達、これを歴史の根源的推進力ととらえ、その資本主義段階での発展の基礎上に未来社会・共産主義は展望できるとする史観、これは確かに進歩史観である。だからマルクスの立場は生涯一貫して進歩史観の立場であったと言わねばならない。そこからの「決別」などない。

しかし、この史観は斎藤の言うようなみすばらしい「進歩史観、」つまり「資本主義がもたらす近代化が、最終的には人類の解放をもたらす」というようなちやちな「楽観的」史観とは全く別物である。

マルクスは、資本主義段階まで進歩した生産力・生産様式から「資本主義的外皮」を剥ぎ取らなければ人類の解放の道は開けない、つまり「資本主義がもたらす近代化」は資本の利害と豊かな生を実現したいと願う人びと(発達した人間の欲求)との対立・矛盾の激化をもたらし、その対立・矛盾の激化が人びとをして社会生活を覆う「資本主義的外皮」の除去に駆り立てるのであって、この除去によってこそ人類の解放の道は開けるのだと一貫して主張していたのである。斎藤の言うような「資本主義がもたらす近代化が、最終的には人類の解放をもたらす」などというようにみすばらしい「楽観的な」史観などに立ったことは全くない。勝手にみすばらしい「進歩史観」なるものをでっち上げ、晩年のマルクスがそこからの「決別」をしたなどと主張するなどは、マルクスの「最晩年の真の理論的な大転換」なる自分の主張に合わせてマルクスを仕立てあげるための「ためにする」ベテンである。

(B) 次に、斎藤は〈晩年のマルクスが「西欧資本主義が目指すべきコミュニティの構想そのものの大きな変容」に至り、「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」を

「評価」(p.193, p.226など)し、その「高次のレベルでの復興」を唱えた。つまり「脱成長コミュニズム」を展望するに至った(p.199)。それこそが「最晩年の真の理論的な大転換」だった。)と主張をするが、このペテンに満ちた我田引水性と虚言・妄言性について

(1) 晩年のマルクスが古代社会研究に精を出したことは存命中にも知られていたことであり、エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』はその遺言執行だとエンゲルス本人が言っている。また、その古代社会研究については、1960年代からモスクワのマルクス・レーニン研究所やアムステルダムの世界社会史国際研究所に保管されている草稿の発掘(MEGAとして体系的に整理される過程でのこと)によって国際的にも研究が深まり、日本でも1970年代には何人かの研究者がその成果を紹介したり研究を深めたりしてきた(稿末〔参考資料〕参照)。斎藤の言及している資料も1970年代当時のものと同じであり、その特異で浅薄な我田引水理解が新規=新奇なだけである。

(i) 稿末〔参考資料〕にもとづいて解説しよう。

晩年マルクスは『資本論』の完成の努力を続けながらその一環として古代社会研究に精を出した。そのきっかけは1877年ロシアのナロードニキからロシアの革命の道について提起された問題、つまり4年後ザスーリチから再度問われることになる〈ロシアの変革における村落共同体のありうべき運命について〉の問題、に答える必要に迫られたことであった。((参考資料)『祖国雑記』編集部への手紙) = 「オテーチェストヴェンヌエ・ザピスキ」編集部への手紙参照のこと)。

それから4年後、1881年2月16日ザスーリチから、①ロシアの変革におけるロシアの村落共同体のありうべき運命について、どう考えたら良いか。②世界のすべての国ぐにが資本主義的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然なのか、について改めて見解を問う手紙を受け取ったマルクスは、1877年以來4年間の古代共同体の研究を踏まえて3回にわたる準備草稿を重ねた後、同年3月8日ザスーリチへ返答の手紙を出した。死の2年前つまり「最晩年」のことである。

その手紙でマルクスは、①の問題について次のような見解を示した。この手紙自体は極めて短いもので(全集⑱ pp.238-9)、『資本論』の資本主義的生産の創生分析(本源的蓄積論)で示した「生産者と生産手段との根底的分離」の運動は、西ヨーロッパに「明示的に限定」していることを再度強調した(斎藤の言うマルクスの「ヨーロッパ中心主義」なるものの虚妄)上で、「西ヨーロッパの運動においては私的所有の一つの形態から他の一つの形態への転化が問題となっている」のに対して「ロシアの農民にあっては彼らの共同所有を私的所有に転化させるということが問題」なのだから、『資本論』は「農村共同体の生命力について賛否いずれの議論にたいしても、論拠を提供していません。」と端的に述べ、その上で、この問題については、自分はこの間「特殊研究」をしてきた結果「つぎのことを確信するようになった」として次のように述べた。

「この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点(Stützpunkt)であるが、それがそのようなものとして機能しうするためには、まずはじめに、あらゆる側面からこの共同体に襲いかかってくる有害な諸影響を除去すること、ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要だろう。」と。

(ii) この簡潔に示された見解を理解するには、この手紙に対する返答のための三つの準備草稿(全集⑱ pp.386-409)によく目を通しておくことが必要である。この準備草稿にはマルクスの言う〈この間の「特殊研究」〉の成果が凝縮されている。私は以前に十分目を通していたが今回改めて熟読した上で、要点をまとめるとこうである。

問題のロシアの村落共同体は、マルクスの古代研究の成果によれば〈農耕共同体〉〈農村共同体〉(Dorfgemeinde)と呼ばれるもので、最も原古的な共同体(氏族・部族血縁共同体による大地の共同所有、共同家屋住居、共同耕作)から進んで、そこでは土地は共同所有だが、人間生活の基本単位として自立してきた家族による土地の分割地耕作と用益(個別家屋・屋敷地形成)が行なわれ、家族による耕作物の取得(私的取得)・消費が行なわれる(これによる個人の発展、私的所有の生成)、こういう共同体である。三つの準備草稿ではこの共同体を詳しく検討した上で、この共同体について「共同所有にもとづく社会から私的所有にもとづく社会への過渡段階」(全集⑱ p.407)と位置づけ、ロ

シアではこの〈農耕共同体〉が「広範な帝国の農村生活の支配的な形態である」ということを確認する。

そこで、ロシアの変革においては、この広範に残存する〈農耕共同体〉が「この共同体に襲いかかってくる有害な諸影響」を免れて将来に存続するなら、その〈土地の共同所有〉は将来社会の共同的労働・生産＝〈集团的・共同的取得（領有）〉の「自然的基礎」になり得る。なぜなら、ロシアが西欧の資本主義と同時的に存在しており、資本主義は「大規模に組織された共同労働」という成果を創り上げているから（全集19巻392、395、401、408ページ）、ロシアが変革再生される際には、広く残存するこの〈農耕共同体〉の〈土地の共同所有〉は、直ちにこの資本主義が達成した共同労働の直接的土台となって新社会の〈集团的・共同的取得（領有）〉の基礎になりうるからだ。

以上がザスーリチ宛の手紙の三つの準備草稿全体の基本的な内容であり、手紙本体において示された農耕共同体の「ロシア社会再生拠点論」なのである。

ただし、その〈農耕共同体〉が「拠点」機能を果たしうるためには、「あらゆる側面からこの共同体に襲いかかってくる有害な諸影響（つまりは地主制や国家や資本主義の諸影響・・私）を除去」あるいはそれを「免れ」て、「自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保すること」が必要だとしたのである。果たしてこのことが可能かどうかについてはマルクスは何とも言っていないことに留意しておく必要がある。

(2) さて、以上がザスーリチ宛の手紙の三つの準備草稿全体の基本的な内容であり手紙の主意だった。つまり、ロシアに広範に残存する〈農耕共同体〉が「この共同体に襲いかかってくる有害な諸影響」を免れて将来に存続するなら、ロシアの変革において、その〈土地の共同所有〉は西欧資本主義が達成した共同労働・集团的生産様式を取り入れてその「自然的基礎」として〈集团的・共同的取得（領有）〉の「直接的土台」になり得るということ、これである。

(i) ところが、斎藤は自己の主張である「脱成長 Kommunismus」論をマル

クスから引き出すために〈「ザスーリチ宛の手紙」再考〉なるものを行い、著作184ページから199ページにかけて次のようなとんでもない解釈を引き出すのである。つまり、「ザスーリチ宛の手紙」で〈マルクスは「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」に至り (p.192), 「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」を評価し (p.193など), その「高次のレベルでの復興」を唱えた。つまり「西欧資本主義を真に乗り越えるプロジェクトとして、『脱成長 Kommunismus』を構想する地点にまで達していたのだのだ」(p.199)。それこそが「最晩年の真の理論的な大転換」だったのだ」と。

この捏造・ペテンの仕組み・手法は、(I)で明らかにした手法と同じであるが、以下解説する。

① 最大の我田引水的捏造・ペテン；資本主義から次の社会「Kommunismus」への移行について、マルクスがそこで、「資本主義時代の成果」を「基礎」としてではなく、農耕共同体のような「共同体の力を基礎」として行なうことが出来るのだという「歴史観の大きな転換」を示したのだとする大捏造・ペテン

このペテンの仕組みを明らかにしよう

すでに明らかにしたように、「ザスーリッチ宛の手紙」・その準備草稿は、ロシアの革命運動を担うナロードニキのザスーリチから、「ロシアの変革におけるロシアの村落共同体のありうべき運命について、どう考えたら良いか。」という問いに対してのマルクスの答えであった。つまり、ロシアの革命・変革運動の戦略における「村落共同体」=「農耕共同体」の位置づけ・取り扱い問題に対する答えであった。

この問いに対して、マルクスは「特殊研究」を行なった結果、ロシアでは「農耕共同体」は「農村生活の支配的な形態」として広く残存している現実の確認に立って、ロシアの変革においては、この広範に残存する〈農耕共同体〉が「この共同体に襲いかかってくる有害な諸影響」を免れて将来に存続するなら、その〈土地の共同所有〉は将来社会の共同的労働・生産=〈集团的・共同的取得(領有)〉の「自然的基礎」になり得る。なぜなら、西欧の資本主義は「大規模に組織された共同労働」という成果を創り上げているから、ロシアが変革再生

される際には、広く残存するこの〈農耕共同体〉の〈土地の共同所有〉は、直ちにこの資本主義が達成している共同労働の直接的土台となって新社会の〈集团的・共同的取得(領有)〉の基礎になりうるからだ。そういう意味において、ロシアでは「農耕共同体」がこのまま無傷で残った場合「社会的再生の拠点」になりうると思う。こう答えたのであった。

つまり、「農耕共同体」の共同的土地所有が広範に残存しているロシアでは、社会変革において、それが資本主義の達成した成果である「大規模に組織された共同労働」を取り入れて、その直接的土台になりうる。そういう意味で、「農耕共同体」は「社会的再生の拠点」になりうるというのが「ザスーリッチ宛の手紙」の趣旨であった。

ところが、斎藤はこれに我田引水的ペテン解釈を施して、マルクスはここで〈農耕共同体〉を「高く評価」し、「その共同体の力を基礎として、コミュニズムへの移行が行える」(p.185)と言っているのだと解説し、ここに「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ(194ページの)「歴史観の大きな転換がうかがえる」(p.185)などと言って、マルクスが「歴史観」という社会変革の一般理論次元での大きな転換を示したと言うのである。

このペテンの仕組みは2段構成になっている。

(a) まず、斎藤は、マルクスが〈ロシアの変革においては「農耕共同体」が「社会的再生の拠点」になりうる〉と述べている文脈に目を付けて、これを〈資本主義時代の成果〉を「基礎」としてではなく、「農耕共同体」のような「共同体の力を基礎」として「コミュニズム」へ移行ができる〉と言っているのだとする我田引水解釈を行なう。これがペテン第1段である。

「コミュニズム」という将来社会への移行は「資本主義時代の成果」を「基礎」としてこそ出来るとするのが『資本論』の立場であった。これを捨てて、「農耕共同体」のような「共同体の力を基礎」として「コミュニズム」へ移行出来ると言うのだから、これはマルクスの将来社会展望・社会変革論の大転換つまり「歴史観の大きな転換」だというわけである。これは言うまでもなく我田引水のウソである。

見てきたように、「農耕共同体」が広く残存するというロシアにおいて「農

耕共同体」が「社会的再生の拠点」になりうるという意味は、その「農耕共同体」が保持する土地の共同所有が「資本主義時代の成果」である「大規模に組織された共同労働」＝「集団的生産様式」の「自然的基礎」となり、〈集团的・共同的取得(領有)の「直接的土台」になり得るからだという意味においてであった。これがマルクスの示した見地であった。つまり、ロシアでは「農耕共同体」は「資本主義時代の成果」である集団的生産様式を取り入れてその「自然的基礎」になりうる、だからそれは「社会的再生の拠点」になりうるということなのである。「農耕共同体」は資本主義の達成物・成果があるからこそ「社会的再生」の「拠点」になりうる、これがマルクスの示した見地だったのである。

ここには、「資本主義時代の成果」を「基礎」として将来社会展望する立場から〈「資本主義時代の成果」を「基礎」としてではなく「農耕共同体」のような「共同体の力」を「基礎」として「 Kommunismus」へ移行ができる〉立場への転換という「歴史観の大きな転換」などなど全くない、我田引水解釈に依るペテンである。これが第1段のペテンである。

このペテンの基礎の上に次のペテン第2段が重ねられる。

(b) 見たように「農耕共同体」が「社会的再生の拠点」になりうるとのマルクスの見地は社会変革におけるロシアに固有の問題であった。この「社会的再生拠点」論を〈「共同体の力」を「基礎」として「 Kommunismus」へ移行ができる〉という意味にペテン解釈をするのが第1段であった。それをロシアに固有の次元の問題ではなく「西欧社会における将来社会の構想」におよぶような変革の一般理論次元の問題にすり替えるのが第2段である。

つまり、マルクスが示した見地は、ロシアでは「農耕共同体」は農村生活の支配的な形態として広く残存しているという特殊な現実がある。そのゆえにこそ「農耕共同体」がこのまま無傷で残った場合「社会的再生の拠点」になりうるということであって、「農耕共同体」が殆ど残存していない発達した資本主義を念頭に置いた西欧社会の変革一般次元の問題をマルクスは論じているのではなかった。ところが、斎藤はこのことに意図的に目をつぶって、いつの間にかマルクスは「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ問題を論じているのだというペテンを行なうのである。〈「資本主義時代の成果」を「基礎」とし

てではなく「農耕共同体」のような「共同体の力」を「基礎」として「コミュニズム」へ移行ができる」というペテン解釈を、ロシア固有の変革論次元から資本主義社会変革の一般論次元に祭り上げ、「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ「歴史観の大きな転換」をそこに見出すというペテンをやっているのだからである。

斎藤がこうした2段階構成のペテンを行なう目的・動機についてはこれまで見てきたことからしてすでに明らかである。つまり斎藤の「脱成長コミュニズム」論は「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」への復帰・その再生論であった。この自分の主張・構想を根拠づけるために、〈資本主義の成果〉ではなく「前資本主義的な共同体の力」が「基礎」となり、主因となつての「コミュニズムへ移行ができる」という筋書きが必要であつた。その必要性から、「ザスーリチ宛ての手紙」を「再考」・利用して、マルクスがそこで「共同体の力」を「基礎」として「コミュニズム」へ移行ができる」という「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ「歴史観の大きな転換」を行なつていたのだという大ウソを作り上げているのである。

(c) すでに〔1〕の(B)において原文・訳文を掲げておいたように、マルクスは「資本主義的蓄積の歴史的傾向」節の結語において、『資本論』第1部の総まとめとして「資本主義時代の成果」の基礎の上に「個人的所有」の「再建」という将来社会を展望した。「資本主義時代の成果」の上に将来社会を展望するこの見地は、1880年6月の「フランス労働党の綱領前文」での「すべての人間の解放」に到る「生産手段の集団的所有形態」実現に必要な「物質的および知的な諸要素」は「資本主義社会の発展」が作りだす」との見地に貫徹していつている。それは1881年3月の「ザスーリチ宛ての手紙」においても何ら変わっていない。これこそがマルクスの一貫した「コミュニズムへ移行」論の基本的な見地なのであつて、ロシアの場合、広く残存する「農耕共同体」の土地共有が、この「資本主義時代の成果」に含まれる「物質的」諸要素の中の土地の共同所有(占有)を直接代替出来る、つまり資本主義が達成した共同労働・集団的生産様式の直接的土台になることが出来る、そこに特殊性があるという

のがマルクスの示した見解であった。「ザスーリチ宛の手紙」においてマルクスが、変革一般次元の問題として、将来社会への移行の基本的な前提・要因を「資本主義時代の成果」ではなく、古い「共同体の力」に見出し、「共同体の力を基礎として、コミュニズムへの移行が行える」と考えるに到ったなどと言って、そこに「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ「歴史観の大きな転換」が見出されるなどというのは、マルクスの我田引水解釈による捏造・ペテン以外の何ものでもない。マルクスにそのような「歴史観の大きな転換」などない。そのことはすでに〔Ⅱ〕の(A)においても明らかにしてある。「西欧社会における将来社会の構想」におよぶ「歴史観の大きな転換」などは大ウソである。

以上から分る通り、マルクスが基本的な歴史観・変革観として、農耕共同体などの「共同体の力を基礎として、コミュニズムへの移行」を唱えるに到ったのだとか、そこに「歴史観の大きな転換がうかがえる」「西欧資本主義が目指すべきコミュニズムの構想そのものの大きな変容」が示されたなどというのは、ためにする捏造・大ウソ以外の何ものでもない。

この大ウソの上に立って、「準備草稿」第1草稿のなかでかでマルクスが残している断片的記述、最終草稿である第3草稿では不要なものとして捨てられ跡形も残さなくなる挿話的記述に次のような小細工を施した上で、マルクスが『脱成長コミュニズム』を構想する地点に・・達していた」のだという大ペテンを完成させるのである。

② 我田引水捏造・ペテン解釈を補強する三つの小細工による「マルクスが『脱成長コミュニズム』を構想する地点に・・達していた」のだという大ペテンの完成
その1. 斎藤は著作 p.190-1で、「ザスーリチ宛ての手紙」の準備草稿の第1草稿のなかでマルクスが残している次の断片的記述、最終草稿である第3草稿では不要なものとして捨てられ跡形も残さなくなる挿話的記述を、自分の「脱成長コミュニズム」論に利用するために引っ張り出してきて、マルクスは「ザスーリチ宛ての手紙」において「こう結論づける」として、「〔資本主義の〕危機は、資本主義の消滅によって終結し、また近代社会が最も原始的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有（取得）へと復帰することによって終了

するであろう³²」との引用文を載せる。

ここでの明白なペテンの第1は、準備草稿で挿話的に記述された断片をもってきて「手紙」本体の記述であるかのように見せるペテンである。引用文の最後の32という註の出所をたどると（斎藤著作371ページ下段）、全集①9393ページとある。これがウソである。「ザスーリチ宛ての手紙」は全集①238-9ページであって、393ページは「手紙」への3つの準備草稿の第1草稿である（斎藤は著作187ページではこの文の隣接箇所を「草稿」としてはいるが、ここでは「手紙」本体としている）。引用出所提示のいい加減さに加えて、「手紙」本体が公的見解であるのに、準備草稿で書き綴ったことの断片、しかも最終草稿では捨てられてしまう挿話的断片的記述をもって「手紙」本体の記述であるかのように見せる。こういう小細工のペテンをする。（I）の（B）の（3）で明らかにしたペテンと同類の所業である。参照されたい。

その2. マルクスが「ザスーリチ宛ての手紙」において「こう結論づける」という斎藤の言い回し自体がペテンである。準備草稿での記述は「原古的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有（取得）へと復帰することによって終了するであろう」となっているだけで、「そうなるだろう」と予測・推測しているのであって、「結論づけ」などしていない。この手法は「なるだろう」という予測・推測の文言を「そうしなければならない」というような当為の文言に変える次の手法に発展させられる。

その3. 斎藤は自分の主張にマルクスを利用するために、後で明らかにするように、マルクスが手紙の第1準備草稿のなかで、モルガンの言葉をなぞって資本主義後の未来社会が「『原古社会の型の、より高次の形態（in a superior form）での復活（a revival）となるであろう。』』（『はモルガンの言』という断片的記述を残しているのに飛びついているにすぎないのであるが、それを「『原古的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有へと復帰』しなくてはならないとマルクスが言う」（著作 p.195）などと捏造・言い変えを行なうのである。つまり、「なるであろう」という予測・推測の文言を「しなくてはならない」という当為の文言にすり替え・捏造するのである。これは学問的に犯罪すれすれのあざとい我田引水のすり替え、ペテンである。マルクスは

「しなくてはならない」などと言っていない。モルガンが言っているように「なるであろう」といっているだけなのである。

つまり、斎藤には「脱成長」のためには「原古的な」あるいは「前資本主義的な」[生産を伝統に基づいて繰返している循環型の定常型経済]に「復帰しなくてはならない」という自分の主張があり、この主張をマルクスの利用・援用によって支えるために、まず、ロシアに広範に残存する「農耕共同体の〈土地の共同所有〉は将来社会の共同的労働・生産＝〈集团的・共同的取得(領有)〉の「自然的基礎」になり得るという「ザサーリチ宛の手紙」準備草稿および手紙本体の主意をひっくり返して、マルクスがここで「資本主義時代の成果」を「基礎」としてではなく「農耕共同体」のような「共同体の力を基礎」としてコ「ミューニズム」へ移行できるのだという「歴史観の大きな転換」「西欧資本主義が目指すべきコミューニズムの構想そのものの大きな変容」を示したのだという我田引水解釈・捏造を行なう。そして、その上に立って、準備草稿の一断片を手紙本体の結論であるかの如く設えるペテン上に、引用文にあざといペテン小細工をすることによってマルクスが「原古的な」社会へと「復帰しなければならぬ」と「結論づけ」ているのだと強引に主張して見せるのである。何たる我田引水解釈・捏造・あざといペテンか！

こうした捏造・ペテンの積み重ねの上に、マルクスが「復帰しなくてはならない」と言う「原古的な」社会の在り方は「伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」なのだから、この「復帰」は「経済成長をしない循環型の定常型経済」への「復帰」つまり「脱成長コミューニズム」なのだ。こういう理屈の組み立てによって、マルクスは「『脱成長コミューニズム』を構想する地点に・・・達していた」のだという大ペテンが完成されるのである。

以上が斎藤の「ザサーリチ宛の手紙」再考なるものである。何というペテンか。

(ii) 重要なことは、その第1草稿の当該箇所は、ロシアに広範に残る「農耕共同体」は資本主義と同時にあり、生産における集団労働という「資本主義

の成果」を身近に伴っている、しかも資本主義は危機にある。こういう認識の上に、すぐ後で見るとようにモルガンの言葉を借りて、「近代社会は集団的な所有および生産の『原始的な』型のより高次な形態へと復帰することによって消滅するであろう。」という記述を挿話として書き留めているところなのだという事である。

ここに言う「集団的な所有および生産の『原始的な』型のより高次な形態」というのは、これまでの整理で分るように、〈土地・生産手段の共同所有（占有）〉にもとづいて、「資本主義の成果」たる集団的・共同労働によってなされる集団的・共同的取得（領有）のこと以外の何物でもない。これは『資本論』第1部「資本主義的蓄積の歴史的傾向」末尾の有名な将来展望と何ら変わらない。それはまた、この手紙の前年1880年「フランス労働党の綱領前文」における将来展望そのものである。

ここには斎藤が言うような『資本論』時代からの「歴史観の大きな転換」や「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」、 「理論的な大転換」などというようなことはこれほっちもない。ウソを言ってはならない。

さらに指摘しておくべきことは、もともと「原始的な類型のより高次の形態」への「復帰」という言葉自体、すでに触れてきたがマルクス発案のものではないということである。マルクスは、前記引用文に先立つ箇所、次のように書きとめているのである。「資本主義の危機は・・・近代社会が共同所有の『原始的な』型へと復帰することによってのみ終結するだろう。その形態のもとは——ワシントン政府の支持のもとに仕事をしている革命的志向の疑いなど全くないアメリカの一著者〔L・H・モルガン〕が言っているように——近代社会が志向している『新しい制度』は『原始社会の型の、より高次な形態 (in a superior form) での復活 (a revival) となるであろう。』それゆえこの『原始的』という言葉をあまり恐ろしがる必要はないのである。」(全集⑩ p.388.) と。『』はモルガンの言葉である。

註:この下線部については、稿末〔参考資料〕の布村訳(クレイター編・布村一夫訳『マルクス古代社会ノート』未来社1976年、308ページ)も参照されたい。

つまりマルクスが『資本論』で、資本主義の成果の上に必然的なものとして

展望したところの、土地・生産手段の共同所有（占有）にもとづいて集团的・共同労働によってなされる集团的・共同的取得（領有）という資本主義消滅後の社会について、それはモルガンが言うところの「原古的社会のより高次の形態での復活」と言っているだけである。

『原古的な類型のより高次の形態である集团的な生産および領有へと復帰』しなくてはならない」とか、しかもそれが「生産を伝統に基づいて繰り返している・経済成長をしない循環型の定常型経済」への復帰を展望したものだなどという斎藤の解釈が如何にあざとい我田引水解釈によるベテンの積み重ね産物であるかがわかるであろう。

このように見てくれば「ザスーリチ宛の手紙」（準備草稿を含む）をもって「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」を主張したり、そこから「最晩年の真の理論的な大転換」を導き出して、マルクスが「生産を伝統に基づいて繰り返している・経済成長をしない循環型の定常型経済」への復帰を展望した（『脱成長 Kommunismus』を構想する地点に・達していた」p.199.）などと主張したりすることが、如何に幾重ものウソを重ねて創り出された我田引水の妄言であるかが分るというものである。作為を介在させなければ、「ザスーリチ宛の手紙」や準備草稿からそんなことを読み取ることなど出来ることではない。

『資本論』から1881年にかけての「変化」を言うならば、『資本論』（第1部,1867年）では、ロシアの「農村共同体の生命力についての賛否いずれの議論にたいしても、論拠を提供していない」のに対して、1881年では厳密な条件付きではあるが「ロシアにおける社会的再生の拠点」になりうるという判断に至ったということだけである。これをもって「最晩年の真の理論的な大転換」などを導き出すことに対しては我田引水・捏造もほどほどにせよといわなければならない。マルクスへの冒涇であろう。

以上〔本題〕(Ⅱ)で縷々詳らかにしてきたように、〈晩年のマルクスが「資本論」までの「生産力至上主義・進歩史観・ヨーロッパ中心主義」から「完全な決別」をした〉とか、〈「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」に至った〉とか、〈「前資本主義的な共同体における伝統に

重きをおいた「経済成長をしない循環型の定常型経済」を「評価」して、その「高次のレベルでの復興」を唱えた、つまり「脱成長コミュニズム」を展望するに至ったとか、つまりそういう「最晩年の真の理論的な大転換」があったのだ」とかいう斎藤の大言壮語の主張は、自己の「脱成長コミュニズム」主張をマルクスの利用によって仕立て上げるために、マルクスの強引なベテンに満ちた我田引水の解釈を行なうことによって捏造された虚言・妄言にすぎない。こんなウソに騙されてはならない。

〔Ⅲ〕総括

ここに到って我々は、自己の「脱成長コミュニズム」主張を仕立て上げるために斎藤が行なっているマルクスの強引なベテンに満ちた我田引水の解釈・利用とそれによって捏造された虚言・妄言の全構造を総括出来るところに来た。(1)〈今日の気候変動＝「地球の生態学的限界」を克服するには「脱成長コミュニズム」しかない〉、これが出発点であった。そして、この「脱成長コミュニズム」の原型・モデルを「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」の在り方にもとめ、これを〈コモン〉の在り方だとして、「脱成長コミュニズム」はこの〈コモン〉の再建なのだとする。これが斎藤の主張の構成であった。そして、これをマルクスが晩年到達した見地なのだと主張するのであった。

しかし、マルクスが晩年そんな見地に到達したなどということは全くなく、虚言にすぎないものであった。それは本稿全体を通じて明らかにしたところである。

稿中で触れなかったことで付け加えておくことがある。マルクスのような前資本主義の共同体についての真摯な研究もない斎藤が、あたかもマルクスから得てきているように前資本主義段階に存在した諸共同体が「経済成長をしない循環型の定常型経済」であったという主張をするのであるが、これも全くウソだということである。マルクスはそれらの共同体が「経済成長をしない循環型の定常型経済」であったなどというようなことはどこでも言っていない。

マルクスは『経済学批判要綱』「資本制的生産に先行する諸形態」において、

資本主義成立の歴史的前提としての前資本主義段階における労働主体と労働諸条件との「自然的統一」「本源的結合」の解体を論じる中で、「共同的土地所有」を基礎とする「東洋的共同体」(「アジア的基本形態」)ではその「統一」「結合」が「共同体」という単位であるのに対して、「自由な小土地所有」を基礎とする「西洋の共同体」(「ギリシア・ローマ的」「ゲルマン的」形態)ではその「統一」「結合」が家族という単位になっていることを論じている(このことについては前出、拙著『経済学と所有』pp.168-72で詳説してある)。そこにおいても、これらの共同体が「経済成長をしない循環型の定常型経済」であったなどということはどこを探しても言っていない。また、『資本論』の「本源的蓄積論」においても封建制のもとで存続した「古代のゲルマン的制度」の共有地収奪を論じてはいるが、古代ゲルマン共同体が「経済成長をしない循環型の定常型経済」であったなどどこにも書いていない。また、晩年の「ザスーリチ宛の手紙準備草稿」で「農耕共同体」の検討を行なう中でもそんなことは一切言っていない。それは「脱成長 Kommunismus」論の歴史的根拠付けのために齋藤が恣意的に作った産物にすぎないのであった。

しかし、このマルクスのものでない齋藤の勝手な産物を中核としたその「脱成長 Kommunismus」論構成をもとに、「経済成長をしない循環型の定常型経済」の再建としての「脱成長 Kommunismus」展望がマルクス晩年の到達点だったという虚偽の主張をする大芝居を演じるのであるから、それは必然的にペテンに満ちた所業にならざるをえなかった。本稿はそのペテン所業を明らかにしてきたものであった。

(2) ペテンに満ちた所業の一つが〈(I)『資本論』解釈におけるペテン〉(A)(B)で明らかにしたところの、『資本論』の「本源的蓄積論」および「資本主義的蓄積の歴史的傾向」節結語「個人的所有の再建」展望の勝手な我田引水解釈・利用であった。

そこでのペテンは、「本源的蓄積」論の意義・主題について、それは〈前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた「経済成長をしない循環型の定常型経済」たる〈モモン〉の解体論にあるのだと強引に主張し、資本主義の「否定」・「個人的所有の再建」展望について、偽訳という学問的犯罪までおかして、

それは〈コモン〉の再建つまり「経済成長をしない循環型の定常型経済」の再建＝「脱成長 Kommunismus」なのだ」と主張するというベテンであった。

(3) ベテンに満ちた所業の最大のものが(II)の(A)(B)で明らかにしたことであった。つまり〈晩年のマルクスの理論的な大転換〉なる大ベテンである。

斎藤は〈晩年のマルクスが「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」に至り、「前資本主義的な共同体における伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」を「評価」(p.193, p.226 など)し、その「高次のレベルでの復興」を唱えた。つまり「脱成長 Kommunismus」を展望するに至った(『脱成長 Kommunismus』を構想する地点に・・達していた)p.199)。それこそが「最晩年の真の理論的な大転換」だった。〉という主張を行なう。このベテンである。

このベテンは二つに大括り出来るものであった。

第一は、生半可のマルクス理解をもとに、晩年のマルクスが「資本論」までの「生産力至上主義・進歩史観・ヨーロッパ中心主義」から「完全な決別」をしたなどという主張をして、それこそがマルクスが「脱成長 Kommunismus」展望へ到達したことと軌を一にする社会観・歴史観上の大変化だったのだと主張するベテンである。『経哲草稿』以来のマルクスの見地を真摯にたどり、晩年の見地を作為なく検証すればそういう主張の虚偽はすぐに明らかになるものであった。(A)はそのことを明らかにした。

第二は、晩年の「ザスーリチ宛の手紙」および手紙本体の主意のひっくり返し、「準備草稿」断片の我田引水的解釈・利用によって、マルクスがここで「脱成長 Kommunismus」を展望するに至った(『脱成長 Kommunismus』を構想する地点に・・達していた)と主張する大ベテンである。

そのベテンは二つの階層をなして行なわれる。

その第1階層は、マルクスがそこで「Kommunismus」への移行について「資本主義時代の成果」を「基礎」としてではなく、「農耕共同体」のような「共同体の力を基礎」として行なうことが出来るのだという「歴史観の大きな転換」つまり「西欧資本主義が目指すべき Kommunismus の構想そのものの大きな変容」を示したというベテン解釈であった。そんなことは、「準備草稿」の我田引水

的解釈・利用以外の何物でもなかった。

このペテンに重ねて第2層目の大ペテンは、それ自体2段構成をなすものであった。まず「準備草稿」で〈資本主義の成果〉たる土地・生産手段の共同所有(占有)にもとづいて、集团的・共同労働によってなされる集团的・共同的取得(領有)というマルクス自身の資本主義後の未来展望について、マルクスがモルガンの言葉をそのまま援用して、それは「『原古社会の型のより高次の形態(in a superior form)での復活(a revival)となるであろう。』」(『はモルガンの言)という断片的記述を残しているのに飛びついて、「準備草稿」を「手紙」本体とするペテンの上に、これを「『原始的な類型のより高次の形態である集团的な生産および領有へと復帰しなくてはならない』とマルクスが言っているのだというようにあざとい我田引水の捏造解釈を施す。

そして、その上に立って、そのマルクスが「復帰しなくてはならない」と言う「原始的な」社会の在り方こそは「伝統に重きをおいた」「経済成長をしない循環型の定常型経済」そのものなのだから、この「復帰」は「経済成長をしない循環型の定常型経済」への「復帰」つまり「脱成長コミュニズム」に他ならない。こういう理屈によってマルクスが「『脱成長コミュニズム』を構想する地点に・・達していた」のだという大ペテンを完成させるのである。

これをもって「最晩年の真の理論的な大転換」という大ウソ宣言を発するのであった。このペテンの構造を解き明かしたのが(B)であった。

〔結び〕 2021年初頭に〈中央公論支援の「2021新書大賞 第1位」 早くも20万部突破〉という派手なキャッチ広告で宣伝された斎藤幸平のこの著作について、友人にコメントを乞われて読んだ結果、そのマルクス援用の我田引水とそこから導かれる主張の虚言・妄言に驚き、マルクス研究に30年を費やした研究者として、これは座視すべきではないと思うに至った。2021年2月はじめのことである。

マルクスを深く研究したことのない多くの人びと、あるいはマルクスを多少かじった人でも晩年のことまでは知らない人達は、マルクスの「晩年の理論的な大転換」などといわれるとうっかり信じてしまう危険をはらんでいる。この我

田引水・ペテン・妄言を明らかにすることはマルクス研究者としての社会的責任だ、この思いが私を駆り立てた。

それだけでではない。20世紀少くない人が人間の豊かな生の実現を願って、資本主義社会の矛盾の解決の道をマルクスの資本主義論・社会主義論に求めていた。しかしながら、「マルクス・レーニン主義」を掲げ、「社会主義」を名乗った旧ソ連などの崩壊によって、ある種の混乱がこの人びとを襲った。「マルクス主義は死んだ」とか「マルクスの再審」とかが喧伝される中で、人間の豊かな生の実現のために現実を変革し将来社会を展望しようと努力する真面目な人びとは、21世紀のこの資本主義の発展段階において、あらためてマルクスの資本主義論・社会主義論の何を生かし、何を限界として捨てるべきかを整理する必要に迫られてきている。確信ある展望をつくり出すためには、今こそ現代的地平に立って、マルクスの歴史理論・経済理論、社会主義論の意義とその限界を明確にする必要がある、これが私の思いである。そのためにはマルクスの歴史理論・経済理論、社会主義論のくもりのない正確な理解が大前提なのであって、斎藤がやっているような、ペテンに満ちた我田引水援用やそこからの虚言・妄言による「マルクスの復権」などはそれを妨げる以外の何物でもない。こんなことをしてはならない。この思いが深いところで私を突き動かした。

本稿はそうした思いの産物である。

[参考資料] 晩年のマルクスについて

〈晩年マルクスの共同体・古代社会研究〉

1877年11月『「祖国雑記」編集部への手紙』（「オテーチェストヴェンスエ・ザピスキ」編集部への手紙、全集19巻、p.114-8）。

1879年9月頃 コヴァレフスキーが『共同体的土地占有、その解体の原因・歩みおよび諸結果』をマルクスへ寄贈、この研究を1880年2月頃まで行い、詳細なノート作成。

インド共同体、ロシア共同体の研究深化

（1881年2月16日 ザスーリチからマルクスへ手紙）

1881年3月8日 マルクスからザスーリチへの回答手紙（手紙と3つの草稿はともにME全集19巻に所収）

1881年5月から1882年2月にかけて、すでに目を通していたモルガン「古代社会」を

集中的に勉強 → 「古代社会ノート」

1883年 死去

1884年 エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」(マルクスの『遺言執行』; エンゲルス自身の言葉)

*1870年代後半から晩年にかけてのマルクスの古代社会研究の成果は、エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』に結実している。

〈日本での紹介・研究〉

1960年代モスクワのマルクス・レーニン研究所やアムステルダム の社会史国際研究所に保管されている草稿の発掘 (MEGA として体系的に整理される過程) によって国際的にも研究が深まり、日本でも1970年代には何人かの研究者がその成果を紹介したり研究を深めたりしてきた。

- ・ クレーダー編・布村一夫訳『マルクス古代社会ノート』, 未来社1976年 (当書巻末にある布村の「解説」に晩年のマルクスの研究営為が詳しく記されている。)
- ・ 同『共同体的土地所有ノート』第1章邦訳と解説; 『未来』誌1974年7.9.10月号
- ・ 馬場明男「クレーダー編『民族学ノート』」『社会学論叢』1974年, 59号
- ・ 福富正実「B・I ザスーリチ宛の手紙への回答および下書き—「社会的再生の拠点」という認識への研究過程を中心に—」現代の理論社編集部編『マルクス・コンメンタールV』現代の理論社刊, 1973年 (福富正実・田口幸一著『社会主義と共同占有』創樹社, 1984年刊, 第1部所収)

〈ここから私の整理〉

1) 1881/ 2/16 ザスーリチからマルクスへの手紙の内容については上記福富論文で紹介されている (『社会主義と共同占有』p.44-45)。次に抜粋する。

「この手紙の中で、ザスーリチは、ロシアの農業問題や村落共同体の問題がロシアの革命家たちのあいだで討論されており、この討論においては『資本論』が一定の役割を果たしていると言った後に、次のように述べた。」「『この問題がロシアの焦眉の問題だということ』『…とくにわが』ロシア『社会党にとってそうだ』ということは『あなたは誰よりもよくご存知です。……最近では、村落共同体は古代的な形態であって、歴史……によって没落すべき運命に定められているという意見を、わたしたちはしばしば耳にします。そういう説を唱える人びとが、あなたのほんとうの弟子、『マルクス主義者』だと自称しています。』『この問題についてあなたのご意見にわれわれがどんなに深い関心をよせているか、わが国の村落共同体のありうべき運命について、また、世界のすべての国くにが資本主義的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然的だという理論について、あなたがご自身の考えを説明くださるならば、われわれにとってどんなに大きな助けになるか、これがおわかりだと思います。」

ここに二つの問題提起

①ロシア革命における村落共同体のありうべき運命について、革命戦略上どう位置づ

ければ良いか。

②世界のすべての国ぐにが資本主義的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然なのかについて

2) この二つの問題については、ザスーリチ宛の手紙に先立つ4年前の1877年11月に、マルクスは「『祖国雑記』編集部への手紙」(「オテーチェストヴェンヌエ・ザビスキ」編集部への手紙、全集19巻、p.1148)において次のように述べていた。

まず②について；自分は何の民族も西ヨーロッパの資本主義化および資本主義発展の道を通らなければ、その先の「人間の最も全面的な発展を確保するような経済的構成」に到達出来ないというようなことは決して述べていない。『資本論』本源的蓄積に関する章は「資本主義的経済秩序が封建制経済秩序の胎内から生まれ出てきたその道をあとづけようとしただけ」ものにすぎず、章の最後の「資本主義的蓄積の歴史的傾向」まとめは「それにさきだつて資本主義的生産について与えられている長い叙述の要約」にすぎない。だから、「西ヨーロッパでの資本主義の創生に関する私の歴史的素描を、社会的労働の生産力の最大の発展によって人間の最も全面的な発展を確保するような経済的構成に最後に到達するために、あらゆる民族が、いかなる歴史的状況におかれようと、不可避免的に通らなければならない普遍的発展の歴史哲学的理論に転化」するようなことは『願ひ下げにしたい』。(傍線部分は『資本論』マルクスが、斎藤の言うような「西ヨーロッパ中心主義」などではなかったことを自ら語っていることに留意！)

だから、ロシアについていえることは、西ヨーロッパにならつて資本主義化を目指すなら農民のプロレタリアへの転化が不可欠なこと、その結果資本主義的發展の道に入れば資本主義の無慈悲な諸法則に服従させられることになること、これだけだ。

①について；ロシアの革命運動のなかで論議されているロシアの村落共同体の生命力をどう評価すべきかの問題に対しては、いずれの議論に対しても「資本論」は「私の見解の鍵」を提供するものではない。つまり②のロシア村落共同体の生命力問題については回答留保していた。

これが1877年11月のマルクス

3) 1881年3月8日マルクスからヘザスーリチへの返答手紙(全集19巻 pp.238-9)では、この間の共同体研究を踏まえて①の問題について3回にわたる準備考察(「手紙への回答の下書き」全集⑩ pp.386-409)を重ねた上で次のような前進した見解を示した。

この手紙自体は極めて短いもので、『資本論』の資本主義的生産の創生分析(本源的蓄積論)で示した「生産者と生産手段との根底的分離」の運動は西ヨーロッパに「明示的に限定」していることを再度強調した上で、「西ヨーロッパの運動においては私的所有の一つの形態から他の一つの形態への転化が問題となっている」のに対して「ロシアの農民にあっては彼らの共同所有を私的所有に転化させるということが問題」なのだから、『資本論』の分析は「農村共同体の生命力についての賛否いずれの議論にたいしても、論拠を提供していません。」と端的に述べる。

その上でこの問題については、自分は「特殊研究」をしてきた結果「つぎのことを

確信するようになった」として次のような見解を示した。

「この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点(Stützpunkt= サポート点)であるが、それがそのようなものとして機能しうするためには、まずはじめに、あらゆる側面からこの共同体に襲いかかってくる有害な諸影響を除去すること、ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要だろう。」と。

簡潔に示されたこの見解を理解するには、この手紙準備の三つの草稿に目を通しておくことが必要である。私は以前に十分目を通していたが今回改めて熟読した上で、要点をまとめておく。まとめた要点は本文に入れたので省く。

4) ゴスーリチ宛の手紙下書き(第1草稿)でのモルガンの言葉の援用のよる次の叙述について。つまり「[資本主義の]危機は、資本主義の消滅によって終結し、また近代社会が最も原始的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有(取得)への復帰することによって終了するであろう」(全集⑩ p.393)がモルガンからの援用であることについて。

全集⑩ p.388. の訳は、「資本主義の危機は・・・近代社会が共同所有の『原始的な』型へと復帰することによってのみ終結するだろう。その形態のもとで——ワシントン政府の支持のもとに仕事をしている革命的志向の疑いなど全くないアメリカの一著者〔L・H・モルガン〕が言っているように——近代社会が志向している『新しい制度』は『原古社会の型の、より高次の形態(in a superior form)での復活(a revival)となるであろう。』それゆえこの『原始的』という言葉あまり恐ろしがる必要はないのである。」となっている。

この下線部は、布村訳(上記クレーダー編・布村一夫訳『マルクス古代社会ノート』未来社1976年,308ページ)では「つまり、革命的傾向の疑いなどすこしもなくて、その仕事をワシントン政府から支持されている、アメリカの一著者が言っているように、近代社会が志向している『新しい制度』は、『より高い形態での』太古的な社会制度の復活であろうとすれば、この『太古的』ということばはあまりにおそろしがるにおよばないわけである。」となっている。

